

放送人の会

会報 No 12

2002.08.09 発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館3階

Tel & fax 03-3221-0019

E-mail info@hosojin.com

代表幹事 大山勝美

全国「ふだんの番組」フォーラム

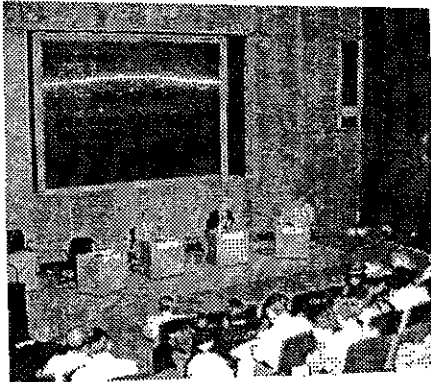
リポーター 同フォーラム委員 石井 清司

地方局自主制作の娯楽番組の現状と中央に依拠しない独自の番組展開は可能か―

「田原茂行プロジェクト」が立ち上げたフォーラムは、7月16日、折からの台風接近の悪条件ながら、地方局から三十余名、その他代理店やNTT関係者、市民団体など参加、盛況裡に開会した。

1、第一部(午前十時) 司会田原によりピックアップしたいくつかの地方局の「ふだんの番組」を上映、解説を行った。

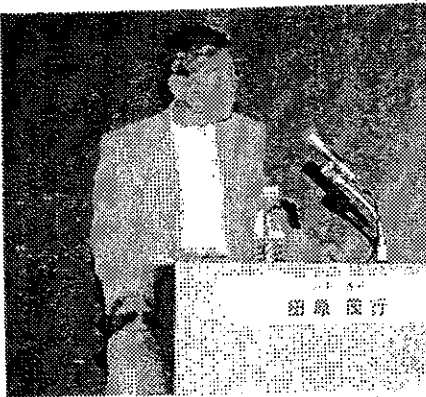
ゲスト・熊本放送「熱血ジャゴ一一座」のプロデューサーディレクター村上雅通氏紹介。「記者たちの水俣病」ほか受賞の多い氏のこれまでのドキュメンタリー作品のダイジェストを上映のあとトークに入った。少額予算などローカル番組の現状について、澤田隆治氏と碓井広義氏が加わって対談。ドキュメンタリー作品と「ふだんの番組」「ジャゴ一一座」制作の共通点と原点について。



その制作にいたる心情を語った。

ついで公開録画番組「熱血ジャゴ一一座」上映。

同番組についての村上氏の発言「ぼつてん荒川は伝統の「肥後」にわか」の第一人者で、地元民謡歌手やタレントを入れた「一一座」とし、熊本県下全市町村を月一回巡り、公開録画(野外の時も)。土地の伝承をもとに毎回「肥後にわか」を新作。流行の「若者狙い」をやめ、年齢をこえた「祭り」に徹した。作り方はごく当たりまえの公開方式だったが、制作者の発想の強さで出色のものとなった。



村上氏―中央への強力対抗の戦略について。

「地域色の番組が、中央の「縮小版」をどう克服するか考えた。行く先々の土地の人に喜んで貰えればいい。それにとことんこだわりの新しい番組づくりのコンセプトにした。全国でのウケについては考えない。つまり、私は「確信犯」だと思っている」

方言による現地カラーの番組。アドリブを多用。カメラ、スタッフ少数の低予算。これが逆に新鮮さと独自の武器になり、ローカル番組の「キー局傘下色」を脱出、「今のテレビ」への反逆で地元の圧倒的支持を得て毎回高視聴率。

「言葉の風化に逆らった。現地の人にも知らない地域のことを毎回発掘し、共通語偏重など中央の一方的押し付けテレビをやめ、熊本本の「足もと」をしつかり見つけた」(村上)

ドキュメンタリーで、カメラを向けて人をとらえる限界を感じ、核心に迫れるならフィクションの積み重ねでもいい、と最後に「ジャゴ一



座」の表現にたどりついた、という。村上氏の現状テレビへの「異議申し立て」としてのこの手法、視点に今後のローカル番組の突破口を見た、というのがフオーラム参加者一同の感想であったようだ。

【会場発言】

「岩手めんこいテレビ」D・千葉徳雄氏「第一印象は『古い作り』だが、これからのローカル番組づくり突破のきっかけになる」

同D・鎌田淑子さん「私には恥ずかしくて作れない。番組であそこまで方言を使うには抵抗がある。私の作りたい番組ではない」

同D・吉田沙織さん「確信犯」という言葉が印象に残る」

澤田「一般論だが、中央のまねで必要以上にへんなギャグでうわべだけで笑わせるローカル番組が多い」
確井「村上氏の才能があったから出来た番組」

ステージ上のゲストの話と、会場の制作者の意見の噛み合わせが、今後のフオーラムには必要、との印象を受けた。

★

2、第二部（午後一時一〇分）
「見廻り奉行、達者でござる」（福井放送）上映。

番組は越前屋俵太氏が武家姿に扮し、福井県三十五市町村をたびこみで歩き、出合いがしらの人と土地を探訪する構成。

同番組は平成五年スタート、視聴

率は伸び、同スペシャルは平成六年度民放連賞テレビ音楽部門最優秀賞を受賞。レギュラー三〇分の週一へ。地域密着の福井テレビ自主制作番組。

「街へ出る。出合いがしらの人と番組をつくる」（俵太氏）視点がビビッドで、福井テレビとの強力なクルーが誕生した。

同番組Pの酒井美樹男氏「キー局の作り方を捨て、カメラとマイクだけを武器にした。福井の人の数の分の感動がある」と、安い予算が故の苦肉のアイディアも生まれた」

【越前屋俵太氏・酒井PDを囲んで、日本テレビ編成部長土屋敏男氏とテレビマンユニオンの田中直人氏が質疑・対談】

越前屋氏「東京では『やらせ』を求められ、ぜんぶ拒否し、仕事が減った。その選択は間違っていない。今、番組づくりで『作る』『仕掛ける』のウソを徹底的に拒否。従来のテレビのつくりへの強烈な反逆を試みている。『テレビとは本来何なのか』と。街の素人をいじり、コケにし笑いをとるつくりを拒否したい」

土屋氏「せっかくとれる『笑い』を仕掛けていない。もったいない。越：『出合いがしらの人に仕掛けるよりも偶然的な笑いの方がずっと心地いい。』テレビへ出て金を貰っているオレって何だ』と自分をとことん見つめつけている。人気タレントに頼るのは演出ではないのではないか」

土：「タレントに頼らない。タレントがだめでも笑いを作る方法はある。文字スーパいや『間』でも作れる」

酒井氏「笑いは強制しない。ウケ狙いの文字スーパはぜったい入れない」

土：「いかに作らないようにするか、では共通。それができれば最高。そこへ行けないから、人間を追いつけて面白くする企画をする」

越：「自分のやってきたことの罪ほろぼしを今している」

土：「それに気づいているのはテレビ界でオレだけだ、という自負はあるでしょう」

既存のテレビバラエティーにみる鋭角的な笑いを重視する土屋氏、土屋の笑いを自らの芸に取り込む越前屋氏、興味深い対論が展開された。

【会場発言】
テレビユー山形の相庭博氏「週一回五十五分、はじめ三万円予算で作った。今は十五万円で作っている」

東日本放送から系列プロダクション社長になった備前島文夫氏「地方のディレクターは何でもできる。この能力はこれからの戦力だ。仙台は東京テレビ文化の植民地地下にある」

★

3、第三部（自由討論）
読売新聞社・鈴木嘉一氏「今のテレビは『これだけはするな』の発想が大事。人はやってくるが自分だけはやるまい」と。そこから新しい方

法論も生まれる」

毎日新聞・萩野祥三氏「キー局のつまらない番組の金を俵太氏の方へまわしては。今のキー局とネットワークの改善点、あるのでは」

富山テレビ放送・青柳良明氏「高額予算の番組も低額のものも、情を伝えている」という共通点がある。そこからずれている番組は人の心を打たない」

北陸放送・力丸伯氏「多くの地域の人に見てもらおうものには、自分の土地の人が見飽きてるものでも必ず入れる、というジレンマがある」

田中直人氏「今日、ぼくの知らないところに、ひとつのテレビの大きな山脈があることを感じた。ローカル局の日常が、今のテレビの大きな全体像を形づくっている」

テレビにおける人の実在感、リアリティとは何か。このフオーラムにはいくつかが手がかりがひそんでいたように思う。



怪（？）弁舌振るう越前屋俵太氏

受賞しました……

石橋冠

ありがとうございます。

第一回放送人の会グランプリ特別賞をいただきました。私は個人的な賞とは無縁だったので授章式のときは嬉しさよりも、怯えが先立ちました。が、会員諸兄の温かい推挙と知り、感激して拝受いたしました。

二年ほど前の記憶が甦ります。

『新宿鮫』のプロデューサー川村尚敬氏は、しみじみ人生を語り合える盟友ですが、その彼がフト漏らした言葉です。

「カンさんは本当にダメですね。

こんな傑作を連発して、ひとつとして賞を獲れないのだから」

たしかに前年、『兄弟』『角筈にて』『玩具の神様』を続けて撮り、自分として演出者人生のピークだと思っていたので、その言葉にズキンときました。

「もうこんなに恵まれた年は二度とありませんよ。ラストチャンス逃して残念でしたね」

賞を意識したことはあまりなかったが、ラストチャンスという一言が妙に心にひっかかりました。

深い洞察とユーモアの持ち主である尚敬氏を、私はバーナード・ショ

「ケイと呼んでいるが、彼は独特の言致で、私に『断念の哲学』を訓え、『職人』への拍手をくれたもの」と解釈して納得したものでした。

ところが、思いもかけぬ今回の受賞です。「断念の哲学」の持つて行き場所がなく周章狼狽し、それが怯えを増幅しました。

でも、授章式から帰り、しっかりと賞状の内容を読むうちに、私は言い知れぬ幸福感に包まれ、思わず賞状を抱きしめました。

賞状にはなんと、私の二十年前のドラマ『池中玄太80キロ』が書かれてあり、ついで前期の三作品、さらに昨年の『茂七の事件簿』『張込み』と書かれています。私の長いディレクター生活に突然光が当たった思いでした。

「お前、よく頑張ってきたな」そんな声が聞こえてきました。

なによりも、私の過去からの仕事をフォローしてくれた、その親身な眼差しがあったことに「努力の職人」はいたく感動し、襟を正しました。ショーケイ氏からも電話がありました。死に一生を得ましたね。もういいでシヨ」

多くの人たちへ素直な感謝も湧いてきます。

「兄弟」の巨大な内容に臆病になっ

た私の尻を猛然と蹴り上げてくれた大山勝美先輩。日テレの報道局に在職中に『新宿鮫2』の仕事が舞い込み、仕方なく退職願いを持っていったら「こっそりやってこい」と片目をつむった故石川一彦氏。民放の報道局長が他局のドラマを演出するという前代未聞のできごとだったので。倉本聡氏は二十五年にわたるNHKとの確執を解いて『玩具の神様』を書いてくれた。

次から次へと、お世話になった人達の顔が泛んできます。

とりあえずは、常に一緒にいてく

鵜沼海洋から

⑤

名誉会長 川口幹夫

ひっこして初めての鵜沼の夏である。何といつてもびっくりするのはサーファーの多さである。

男も女も例の舟型の板を抱えて闊歩している。車が近寄ってくると、ヒラリヒラリとボードごと車をおかしている。さながら波をよけたり乗ったりしてゆくサーファーの如しだ。彼らの特徴、まず一様に色が黒い。手も足もスナナリと伸びている。ふだんから波に乗り波を避けているからだろう。歩いていてもちよつとお尻をふつたりして恰好よい。

「おい、今日はこんなにいい天気なのに、サーファーが少ないな」

れたスタッフたちと喜びを共有したいと思いたち、彼らを招集して酒席をはりました。

「おめでとう！ 乾杯！」

みんなわがごとくのように喜んでくれたが、酒がまわるにつれ異口同音に質問がとんできました。

「ところで、その賞って一体なんですか？」

その夜、密かに誓いました。放送人の会、その情宣にこれつとめなければならぬ、と。グランプリが決して磨れないよう育成しなければならぬ、と。頑張りやう、と。

「曇っててうすら寒いのにすごい数だねエ。何故なんだ？」

妹がストラツと答えてくれる。

「おニイちゃん、古い人間だね。サーファーにとつて一番大事なのは風なんだよ。天気がよくても風の強い日はダメ。風がすべてなんだよ。」なるほどそうか。そう思って道を行く若者の顔を見ると、ある者はいかにも風をつかむのがうまそう。ボードかきで歩く姿にも「これはうまそうだ」とか「これはどうにもなりそうにないな」と思わせるものがある。

人生浮き沈み、さながらサーファの如しだ。放送人生も又かくの如し。皆、いい風を掴め。そしていい波に乗れ。ガンバレ。



梅棹忠夫氏

「知の巨人」のOKをとる

大山 勝美

意表をつかれた。放送人の会賞「特別賞に梅棹忠夫氏」という各務氏の提案は異色であり説得力もあつた。問題の論文「放送人、偉大なアマチュア—この新しい職業集団の人的考察」（中公文庫『情報の文明学』に収録）を読んでみる。興奮するほど示唆にとみ、刺激的である。60年代の昂然と胸を張り、プライドに満ちた放送人の姿がよみがえってきた。4月27日幹事会あとの選考委員の雑談でも「名案、賞に文化性が出る」「大物すぎてなじまない。無理では」という意見が半ばした。何しろプレス発表まで十日しかない。「ダメでも当たるべし」ということになる。

まず梅棹先生への接触法を『放送朝日』の元編集長五十嵐道子さんに聞く。「先生は不正の生まれで京育ちやからさちんとした手紙を出されるのがよろしい」との御指南。下書きを含めて、四時間机に向か

つて唸った。何しろ相手は知の巨人である。簡にして要をえて、目が御不自由だから耳で聞いて判る言葉でなくてはならない。文化勲章、朝日賞などの受賞者に失礼があつてはいけない。相撲でいえば、幕下が横綱に賞を出すようなものだ。速達で出したあと、肩で大きく息をした。

翌29日の午後、国立民族博物館の梅棹資料室の秘書・三原さんに電話を入れる。速達は着いていた。だが肝心の先生は連休休みで、次に来館して開封されるのは、次週の火曜日7日になるという。速達の中味の大綱を話す。「先生は、放送にはもう縁を切つていらつしやいますからねえ」気の毒そうなお口ぶりだ。

とにかく、7日の午後2時、多分先生も手紙を開かれたであろう頃に、電話を入れることにした。8日午後のプレス発表用の資料は、梅棹先生の名前入りと、そうでないのとの二種類をつくらうと明神氏に話す。

賞の副賞の琉球ガラスの作者から、受賞者の最終氏名は？との電話が入る。7日まで何とか待つて欲しいと頼み込む。五十嵐さんに経過説明すると「なに!? 記者発表の前日に返事を聞くの？あの先生は半年以上前に下話しなきゃ駄目なのよ」長々と叱られた。御尤も御尤もである。

7日14時きっかり、会社の小部屋から大阪に電話を入れた。三原さんが「一寸待つて下さい。先生が聞きたいことがあると言われますんで」とすぐに「梅棹です」と柔らかな京

なまりの音が伝わってきた。「私はもう過去の人間ですし、放送からは足洗うてますんでなア」私は電話を強くにぎつて「いや、先生の放送人と初めて命名されたあの論文は、いまも古びていません。放送人が進むべき道を示す原点で、パイプルのような力を持つています。いまこそ再び光をあてられるべきで……」ありつた

の言葉を総動員して喋つた。「ですから第1回目の放送人の会賞を飾る特別賞の別枠、特別功労賞のようなもので、感謝の気持ちをおさしあげたいんです」「……」一寸間があつた。

「そんなに言わはるんなら、厚かましいけど折角やからお受けしましよか。けど授賞式は行けしまへんで」「い、いや、賞状と副賞は、こちらからさしあげに伺います。お受けいただき、本当にありがとうございます！私には思わず立ち上がつて電話器を握つたまま深くお辞儀をして

梅棹さんへの贈賞

野崎 茂

国立民族学博物館（大阪・千里）にやつと辿りついた。思ったよりも大きな建て物だった。3階の梅棹資料室も広々とした。おそらく二〇坪以上あるのではないか。壁面すべてが梅棹さんの著作物その他で埋

まっている。部屋に入つてすぐにおたしは、もと民放連研究所のノザキです、お久しぶりですと声をあげて近づいた。梅棹さんは1962創設時から民放研の研究参与をしておられ、わたしはそこではじめて声咳に接した。最後にお目にかかつたのは、視力を失われるすこし前だった。たぶん1985年です。わたしの声をおぼえておられたのか、おー、なつかしいと手をのばされた。わたしは先生の手をしっかりと握りしめた。

大山代表が賞状と記念品を届けるため大阪に行くという話をきいて、わたしは同行を志願した。久しくお会いしてはなかつたから、自費になつちやうけどと大山さんに言われても、わたしは異存はなかつた。当日、きちんと椅子に座つてお茶をいただき、大山さんがあらためて放送人グランプリ2002・特別賞のゆえんを説明した。先生は上機嫌だった。40年前に「放送朝日」で放送人論をかいたことは先生の脳裡に鮮明に残つていた。その主旨をくんで放送人の会がつくられたことをいたく喜んでおられた。大山代表は賞状の文を読み、賞状と記念品（沖繩ガラス花器）をさしあげた。先生は視力があつた人と同じように手をのばして受け取られた。ガラスの器を手にして先生はストレスまで目を近づけた。こうやるとすこし輪郭はわかるんだけど、色がわからないのでね……。さすが大山代表は、沖繩の海のブルーとサンゴ礁の緑ですと説明。先生は

幹事会報告 NO2 から

6月幹事会・6月29日 15時～17時

於 千代田放送会館3F会議室

出席 大山、久野、田原、斎明寺、荻野、野崎、鈴木典、石井、太田、各務、明神、北村

7月は幹事会は休会でした。

●「全国・ふだんの番組・フォーラム」 7月16日 1～2
ページ参照 報告・田原氏

●「名作の舞台裏③『俺達の旅』(1975～76・NTV
系列で放送)

日時・7月13日(土) 13・30～16・30

場所・横浜情報文化センター6階・情文ホール

主催・放送人の会、(財)放送番組センター 後援・横浜市
パネリスト・中村雅俊、鎌田敏夫、岡田晋吉、斎藤光正

司会・石橋 冠

参加費・無料

(このシリーズは人気イベントとして定着し、当日の会場は満員の盛況。中村雅俊氏にとってこの番組は役者としての人気を確立した思い出深い番組で、気持ちのこもった率直な発言が印象的でした。会場からの質疑、意見の発言も活発でした)

●「放送人の証言」シリーズ 報告・久野氏

6月は和田勉、嶋田親一、澤田隆治、松本明を収録。予定としては 岡田太郎、千秋与志夫、森川時久氏ら。今後は会員も視野に入れて収録を増やしたい。(6月現在 32名収録済み)

●今号の企画を報告。 報告・松尾氏

会員相互の更なる交歓を図るため、来年から隔月刊化、12ページだてを構想している。将来は月間化のための環境整備を図りたい。

●総務関係 報告・北村充史氏

事務室にプロジェクトの小会議用テーブルを設置し、PC機能等を整備中。会員名簿作成済み。(この会報と一緒にお届けしています)これからホームページの改定に取り組む。

事務局は毎週月・水・金の13時～17時オープン。原則として総務の当番も出ています。

●その他

1、11月21日・幕張メッセ、インターBEE公開シンポジウム案 「ミレニアムの放送～私がつくる『時代・劇』」

2、11月25日「民放連大会」(横浜)に併せたフォーラム企画 について、放送番組センターから打診あり。そのためのプロジェクト 立ち上げが提案された。(報告・今野勉氏)

●メールアドレスをお持ちで未登録の方は、事務局までご連絡ください。正確迅速な情報伝達と経費節減に役立ちます。

ガラスの触感と造形を両手でたしかめていた。
視力をなくされるだいが前から、先生は放送に出演しなくなった。アフリカのフィールド調査のさい、朝日放送などから資金を供与してもらって、その分のお返しをしなくちゃならなかった。番組審議会(朝日放送)の委員も熱心にやっだし、番組制作、出演にもけっこう時間とエネルギーをつぎこんだ。やるだけのこととはやって、以後は放送に出なくなつた。でも、40年前はラジオやテ

レビの可能性を思い描くことは楽しかった。放送人のことをかいたのは放送の大きな可能性に期待し、いろいろと手探りをいれていたものです。と先生。大山代表の反応は素早い。そうなんです。業界全体の商業化で、文化をつくりだす放送という立場が衰弱してきた。そう思つて仲間と放送人の会を立ち上げたんです。
話は弾んで、情報産業論に先生が言及された。わたしは、人類最初の情報産業は先生が書かれたのをうけて、山本明(同志社大学)、青木貞伸

さん(2人も故人)と新宗教の教団取材調査をやつて本をつくつた(1975年)と昔の話をもちだす。そこでまた話が盛りあがる。秘書のたがその本を棚からさがしだしてくれたので、わたしは梅棹さんの情報産業論に刺激されて調査をはじめたという部分を讀ませていただいた。先生は自分の説が補強されたことを久しぶりに感じられ、ご満足の様子だった。

ふと腕に目をやると、もう2時間もたつている。先生はいつまでも会話を楽しみたいという思いがおりようだったが、大山代表は心づかいて辞去しようとした。と、先生は自伝的著作「行為と妄想」(中公文庫)を二人にあげるとおつしやつて、筆ペンで本に署名。手探りでしつかりとかいて本をくださった。
あんなに喜んでくださると思ひもしなかつた。二人は増賞を提議した各務孝さんのご明察をかみしめながら民博をあとにした。

南船北馬

複眼のテレビ 勝部領樹

(元NHKキャスター)

あの「アフガン大乱」に集中したテレビの眼は、いまだここに向いているのか。

ニューヨークの自爆テロのあと、アメリカサイドの情報洪水が先行する中で、日本や欧州のテレビは、やがて独自のカメラを現地に動員した。誤爆、難民、貧苦など、アメリカ情報空白を埋めることにそれなりの役割を見出したようだ。その後「W杯の宴」への集中もあってか、アフガン報道は急速に目立たなくなった。私なりに、やし馬OBながら現場に乗り込めぬもどかしさもあって、日夜BSを含め内外のテレビをウオッチング中だ。新世紀初頭を揺るがせた大乱の実相は、一國一局の一過性の単眼でカバーしきれぬものでは無い。国家、民族、宗教の差で視点も評価も異なるとなれば、その多様性をテレビで見比べたいからである。中には、アフガンのけし栽培地へ

の潜入、イスラムテロの欧州拠点ルポ、カンダハル郊外で米軍誤爆の犠牲となった親族一家を密かに取材したアメリカ在住の女性ジャーナリストのビデオ(米国では未放送らしい)など、各国テレビの複眼の目配りも頼りとなった。

その眼はいまだどこにあるのか、気になる。現地カブールに常駐しているのは、日本ではNHKの記者カメラと共同通信社で、当のアメリカはCNN以外は殆ど引き揚げたらしい。NHK現場クルーの場合、ロジャール暗殺などの混乱、農業再建の遅れ、貧困、国際支援など取材のネタは山ほど。その上、未曾有の大乱をアジアの眼で後世に記録することになり、映像音声ともに劣化しないデジタルハイビジョンカメラを任されては休むもとれないらしい。決め手は、やはりテレビの複眼の目線、眼力、人間味が試される。当分「中休みの一服」とは参らぬようだ。現地よ、頑張れ!

『北の国から』の国から

碓井広義

この四月から、北海道にある千歳科学技術大学の専任教師に就任した。設立は4年前で、光ファイバーやレーザーといった「光(ひかり)科学」

に特化した単科大学だ。そのジャンルでの世界的な研究者が何人も在籍している。

理系の学生たちに、これからは、ソフト、コンテンツ、メディアについても教育していきたいとお話があり、やらせていただくことになった。普通は一家で移り住んでもおかしくないところだが、今年で8年目になる慶大での授業やゼミがあり、そして昨年からは東京芸大でも教えている。そこで、東京千歳を毎週自費で往復する「飛行機通勤」ということになった。

千歳では、放送研究と共に、ブロードバンドが研究の対象となる。大容量のインターネットであるブロードバンド。その本命とも言われる光ファイバーの研究では、千歳は「給本山」のような大学だ。専門の先生と共同で、ハード・ソフトの両面を考えていこうと思う。

先日、発注しておいた機材が届いた。デジタルカメラ、録音、照明などの撮影機材からデジタル編集機、そしてインターネットによる映像発信実験のためのコンピュータまで揃ったことになる。

これから、私も初心に帰り、学生たちと一緒に映像について、またメディアそのものについて学び直すつもりだ。

僕のモダンタイムス

荻野慶人

僕は今、塞翁が馬に乗って函館大 学商学部の教壇に立つ。初夏の某日は「チャップリンと喜劇」をテーマに「モダンタイムス」を語った。出席約20名のうち、「観た」の挙手はたったの3人だから、スクリーンを降ろしてVTRをスタートする甲斐があるというものだ。

「一九三六年……七〇年近く昔のサイレント映画だが、機械文明の人間性蹂躪が痛快だ。原子力やコンピュータに人類が翻弄される『新モダンタイムス』で抱腹絶倒させてくれるのは、何処の国の誰だろう」

「SF映画『マトリックス』と があるじゃないですか」と誰かが言うと思いきや「最高の喜劇だと思えます。スタントなしであんなローラー スケートをやっているなんて、すごい俳優ですね」と満点の正解だ。帰京してパソコンの受信トレイを開けば英文で「貴殿の発信メールにウイルスを発見、抹殺して送信せり」と、親切なお節介か、国籍性別年齢不詳の奇妙なメールが届いていた。案の定、数分のうちに感染を初体験した。

「Mail Delivery Subsystem」から「User Unknown」と宛て先不

明の通知が間断なく返信されてくるのだが、アドレスはどれもこれも記憶にない。

無縁で存在もしない不特定多数に、僕が何事かを送信した恰好だ。執拗かつ整然と届く連続着信に「削除」のクリックを繰り返す僕は、コンベヤベルトのベルト振り止められないチャップリンに似てはいまいか。

やっと思つた見覚えのある略称2名は既に他界にあって、俄然コメディーはサスペンスに転調する。2年前のメル友のアドまで僕のファイルから盗まれた気配は、健在する交信相手全員にウイルス侵入で大迷惑の怖れあり……という緊急事態だ。

起承転結が五里霧中で疑心暗鬼の僕は、厄介な輓除と防備は三〇歳の息子に委ねるしかなく、アドレス帖片手に電話に向かった。愉快犯には「俺なんかを困らせて何が楽しいんや、もっとデカイことやれー」と遠吠えした後、慌てて「サイバーテロなど冗談やないでー」と呟いた。

「社外活動」は大学で……

田澤正稔

新潟大学、東工大と、この7月は立て続けに2枚の「社外活動届」を提出した。文字どおり「南船北馬」の趣き。さて、前者はマスコミ学会

から、後者は国立大学からながしかの謝礼金が出た。この扱いについて、はたと考えた。乏しい知識では対してすることになっていたのではなかったか……。で、人事に問い合わせた。「会社業務の延長上のことだし、大体、一〇万円以下の謝金の場合、その必要はありません」とのこと。民放連絡みの、いわば本職以外でこの種の依頼を受けたのは初めてだったので、ちょっと気になっただ次第。

閑話休題。マスコミ学会の春季大会では「放送と視聴者との回路について」をテーマとするワークショップで局の対応の現状を報告し、東工大の教育情報工学赤堀ゼミノ代講の機会を与えられて、「自分にとってテレビメディアとは？」WO受講生に問いました。

マスコミ学会の方は、当「放送人の会」の田原茂行さんが企画者なのでその稿に譲るとして、東工大での授業について。

受講者の顔づくりのため、事前に「自分の関心事」につきメールしてもらったところ、当然のことながら圧倒的に「テレビとインターネット」に集中。しかるべき社内の友人たちに取材して臨みました。で、やはり

ライフラインとしての安全性の観点と、編集された情報の信頼性の観点において地上波の比較優位は動かない、「公共圏」がキーワード、と。ここで授業はタイムアップ、ぼくの紙数も尽きました。(東京放送)

W杯横浜会場から

西田善夫

ベッカムとカーン……この二人がワールドカップ中継でサッカーに目覚めた主婦層のアイドルとなった。片やイングランドの司令塔、一方はドイツの守護神……だがハンサム度では対照的だ。ベッカムヘアの流行は意外に若者に似合った。カーンの所属するバイエルン・ミュンヘンのサポーターは敬愛をこめてカーンにバナナを投げ込むそうだ。カーンのニックネームはゴリラ……。かっこよさと頼もしさ……。共に、自分の夫に求めて満たされなかった日本の主婦層に、ワールドカップ2002はこの二人を届けてくれた。

ワールドカップのテレビは良く見られた。日本がW杯史上初の一勝をあげたロシア戦(6/9・フジテレビ)は66・1%の高視聴率をマークした。スポーツ中継視聴率で史上二位、東京オリンピック・女子バレーボール決勝、日本対ソビエト(当時)、いわゆる「東洋の魔女」に僅か0・7ポイント及ばなかった。サッカーとバレーボールの違いはあっても相手は同じ国、舞台も共に

日本開催、視聴率と試合結果は別としても、いずれも日本が勝つたという共通点がある。

私は二試合ともテレビを見ていない……両方とも現場にいた。それも日本勝利の瞬間を見ていない。38年前の東京オリンピックではバレーボール担当の一番若いアナウンサーだった私はインタビュアーのために、金メダルの感激に浸る間もなく、胴上げの終わった大松監督に走り寄った。

これは規則破りのインタビュアーだった。当時のプロトコルでは、直ちに表彰式を行い、その後ペンと各国記者の共同会見、通訳される言葉も多数になる。それが終わってから放送会見……これだけ時間がかかっては「金メダルの感激の涙」も乾いてしまう。そこで突撃体制、こつた返しの中でも目立つ奴ということ、当時184センチの私が(今は縮んだが)選ばれた。

先日のワールドカップでは、日本対ロシアの試合会場、横浜国際競技場の場長として現場にいた。今回は、お見送りのためエレベーターの前でVIPに頭を下げながら、初勝利の興奮を背中に感じていた。

感動を伝える側と舞台を支える側の双方から二つの場に居合わせた幸運に感謝している。立場が違つただけに見えたこともあった。

ワールドカップ地上波の中継映像に一人の日本人カメラマンも加わっていないことが知られていない。映像を制作したHBS放送局は、今回のワールドカップだけの組織で、カメラマンも世界のフリーランサーで編成されていた。日本国内だけで5班あつたから、多忙期には百人を

越えたり。中継技術を評価して期間中の契約をする。放送局や製作会社に所属する日本の雇用制度では技があつても契約できない。

決勝戦会場の横浜の報道席は広がった。3,500の席を作るために倍近い観客席を潰さなくてはならなかった。IT時代の記者や放送人はペンや原稿用紙など持たない。まずパソコンを置く机、2台のテレビモニター用のスペースもいる。階段式のプレス席の床は滝が流れるように配線が束になつている。それも隠さなくては危険だ。一箇所の断線で世界への音声は切れる。取材陣への注文も多い。「マスコミは横暴だ！」と言つて「場長がそれを言つてはいけませんよ」と身内のスタッフにたしなめられたこともある。しかし、世界で十数億人が見ているという決勝戦のテレビに、ここから実況アナウンサーの声が発信されるかと思うと準備もやりがいがあつた。

HBSのスタッフは開会前からスタジアムに自由に出入りしていた。顔見知りになり話もするようになった。彼らは日本での国際試合のテレビ中継を外国でチェックしていた。「日本の中継はパスを出した選手と受けた選手が同じ画面に映らない」これが彼らの一番の不満だった。「人気選手のアップやベンチの表情が多すぎる。ボールは生きてるのだ」というのだ。ベツカムもカーンも活躍したからリプレーで何度も登場する。そこで注目される……ハンサムだからベツカムではなく、ナイスプレーだから何度も登場する。ピンチを救つたからこそカーンが目につくのだ。ボールはいつも生きて

いる。確かにサッカーのテレビ観戦はトイレに行く時間がない。どうも日本のスポーツ中継は野球モードのどつぶり演かつていすぎた。3時間の野球試合でもボールの動いているのは30分ほどしかない。

NHKが製作した国産のハイビジョン中継では「ワイドでロング」という特性を生かした映像が以前に比べて急増していた。

初の一次リーグ突破で国際レベルに近づいた日本サッカーだが、放送技術では、これから挑戦が始まる。

(元NHK 現横浜国際競技場々長)

会員計報

上野修氏

(株)ラジオプレス代表取締役

6月30日、前立腺腫瘍により永眠されました。氏はニッポン放送にてP&Dに専念、後年はラジオプロダクションを設立、ラジオ界のオピニオン・リーダーとして編成、ソフト開発に努め、傍ら「平成ラジオ塾」に参画、後輩ラジオマンの育成に努めました。

享年71。ご冥福を祈ります。

小里光氏 (演芸評論家)

7月29日、脳梗塞で死去されました。氏は日本テレビ時代に『笑点』を制作し、長寿の人気番組となりました。本会に入会したばかりでした。

享年73。ご冥福を祈ります。



(「全国ふだんの番組」フォーラム 懇親会々場にて。7月16日)

放送界多頻語事典 抜粋

(鎌波書店刊)

◆前説：語源はラジオの公録本番前の前ふり。テレビでは2Hドラマの本文前に脚本家や作曲家がチラッと顔を見せるアレ。犯人が割れるようなマエセツだと目の肥えたお客さんは「犯人はもう分かった」と見ない。構造改革々々と叫ぶだけで中身の無い小泉サンは「マエセツ総理」と呼ぼう。

◆とつばらい：現金手渡しのこと(今は銀行振込み式である)。早朝スタジオだと前日の夕方予め経理部窓口でギヤラを受け取る。すると飲み助の同僚連が「とつばらい男」を帰さない。ゴールデン街でデキ上がったその男、やおら謝金袋を出し「梅川忠兵衛の封印切りだあ」。バカである。翌朝部長に前借りの二日酔い男、謝金袋に詰め直したのは言うまでもない。

◆キュー：ピリヤードの突き棒転じて開始の合図。各人クセがありニュッと突き出すのもあれば相撲のゴツツァン型あり。耳に挟んだ赤エンピツをキュー代わりに出す不精者がいた。その競馬狂いのDがほざいた、「各馬一斉スタートだけど、子持ちの雌馬てえのはマクリが弱い」。今ならセクハラでただじゃすまない。(鳶蟻蝶)

リレー放送現場史

カメラの現場・F↓V

山崎 裕

私はもともとフィルムのカメラマンとして記録映画を目指していた。初めてテレビの仕事をしたのは1965年、TBSの「カメラ・ルポルタージュ」。当時カミカゼ漁船と呼ばれた、たったの39トンの遠洋マグロ漁船に1ヶ月の同行取材。局のカメラマンを出すには危険手当や保険料を考えると高くつくということで、25歳の駆け出しのフリーカメラマンだった私に回ってきた。

60年代の終わりにNTVの牛山純一が中止された「ノンフィクション劇場」の復活を狙って「ノンフィクション・アワー」をスタートさせた。牛山純一と局の撮影部は折り合いがあまり良いとは言えず、スタッフも足りそうにないので、外部のフリーを集める企画「東京人の一生」を立ち上げた。創造社の仙元誠三、元岩波映画の大津幸四郎、元TBSの浅井隆夫他数名のカメラマンに混じって私もそこに加わった。チーフディレクターは市岡康子、サブには後にドキュメンタリー・ジャパンを起こした河村治彦がいた。

カメラマン各々に誕生、恋人、結婚、定年など世代別のモチーフが与えられ、ディレクターなしで取材を

した。フィルムは使い放題で、撮影したものをディレクターと編集者がつないでいった。カメラマンにとって消化不良な仕事だった。

それをきっかけにNTVのドキュメンタリー「素晴らしい世界旅行」の撮影を担当することになった。西イリアンのアスマット地方での取材だ。「文化人類学のマリノフスキーやレイビ・ストロースを読んだことがあるか？」と出発前に聞かれ「ない」と答えると、飛行機の中で読むように数冊の本を用意してくれた。その中のレイビ・ストロースの「悲しき熱帯」に感銘を受け、旅の間に何度も繰り返し読んだ。私にとつての生涯の一冊になった。

牛山純一はその後日本映画記録センターとして独立、時は制作プロダクションの時代に入り、ドキュメンタリー番組も盛んだった。私も日本映像記録センター以外にテレビマンユニオン、TUC（テレコムスタッフの前身）、日本シネセル等で仕事をした。その殆どは海外ドキュメンタリーだった。

やがてフィルムに代わる小型VTRが登場してきた。私も1977年、日本で初めて3/4Uマチックで完パケ制作された海外取材のドキュメンタリーシリーズ「地球は音楽だ」で、初のビデオカメラと付き合うことになり、山のような機材と共にアフリカやヨーロッパを旅した。カメラは日立SK180、1号機はビデオ化に積極的だったテレビマンユニオン、2号機はTUCが購入した。フィルムカメラマンの多くはビデオ化には抵抗感があったようだ。NHKでも撮影部は導入に反対していた。しかし、私はビデオカメラに新鮮な魅力を感じたし、小型ENGシステムハドキュメンタリーにとつて大きな可能性を持つことを感じていた。

カメラとレコーダーがマルチケーブルで繋がりが機動力も落ちる、VEという新しいスタッフも増えた。しかしハードの欠点ははずれ改良される筈だし、画質もブラウン管では16ミリフィルムより優れ、臨場感の強い映像が得られた。現場で映像を見られたり、再生がすぐ出来るのでスタッフ同士の理解が得られ易くなった。1本のテープが20分というのも、音が常にシンクロして2トラックもあるのも魅力だった。私は積極的にビデオによる番組作りに参加するようになった。

80年代に入りENGはあつという間に普及した。私はソニーのVTR、BVU150をバックパックでカメラマン自身が背負い録音と2人だけで撮影できるようにした。またU1マチックでドラマを撮ることも挑戦してみた。

その頃NTVがゴールデンに「ナショナルドキュメンタリー特集」を始めた。私もその番組作りにドキュメンタリージャパンで河村治彦や橋本佳子と参加した。私たちはテープを大量に回す作り方をしていた。見

かねたソニーPCLがU1マチックのオリジンに編集するシステムを組んでくれた。その経験からベーターカムに移行した時も最初からダイレクトに編集出来るようにポストプロにお願いをした。フィルムからビデオに変わり、単に撮影をするだけでなくシステム全体に目を配るようになっていった。

以後デジタル化やHD、16対9と目まぐるしくハードは変化してきた。ドキュメンタリーの方法にビデオ化は大きな転機をもたらしたと私は考えている。だが表現することの本質は変わることはないと思つている。(敬称略)

お知らせ!

第4回 名作の舞台裏 決定!

好評の舞台裏シリーズは、第50回 民放連大会の行事に連動し、テレビドラマ史でも異彩を放ったシリーズドラマ

『北の国から』 (フジテレビ)

☆ 日時 11月25日(月)

・作品上映 14:00~14:50分

・シンポジウム 15時~17時

於 横浜情報文化センターホール
なお、パネラーや出演者などくわしい内容は追ってお知らせします。

と、……思いませんか

準キー局の居場所とは？

藪内広之

私は86年に大阪・毎日放送に入社しました。初配属は東京のラジオ営業部。営業は4年間やりました。ラジオはすべてが関西ローカルですが電波が届かない東京での営業は苦しい、と一般的に言われていました。しかし正直言って、売るのに苦労した思い出は一切なく、次年度の前年比のためにどうやって今の売上を落とすか、とか「営業促進費」をいかに効率よく六本木に投下していくか、体力と相談の日々でした。世の中はバブル景気の真っ只中。ですから、今の厳しい営業状況の中、苦労して売っている人たちに「オレも昔、営業やってね」なんて軽口言うのと、シバかれそうで前歴はなるべく言わないようにしています。とにかく世間を舐めていた日々でした。

不振、準ローカル局なりの発祥確保というサバイバルゆえに決断されたものだとも聞いております。ドラマはまだ『東芝日曜劇場』を年間6本、自社制作してましたから、東京支社のテレビ制作部は、売れっ子のタレントさんや作家さんが出入りしていて、私のような営業のペーペーから見れば、まぶしい存在でした。自分ができるだろうか、なんて引け目を感じながら、何度か愚にもつかない企画書を提出し、結果制作部に引張ってもらいました。

90年のことでした。大阪千里のスタジオでADとして走り回る日々を過ごしていた時、ドラマが大きく変わるうとしていました。例えば『東京ラブストーリー』を研究し、あんな風に撮りたいと思って先輩たちから「あんなのドラマじゃない」と言われたものでした。

93年に『東芝』枠が連ドラ化し、すべてはTBSで制作することになりました。残ったレギュラー枠は昼の帯ドラだけになり、私の主な演出・制作歴はほとんどこの枠のものでした。予算もテーマも限定されていまして、我が社は大阪の自社制作にこだわる、という方針がありましたから、どうしてもドラマ作りのノウハウは過去の財産を食いつぶすだけになりました。東京でのドラマ作りを人に聞いても、それは違う世界の話でした。気がつけば、現在大阪でネットドラマ（昼帯も一応ネット）をレギュラーで制作しているのはBKさんとMBSだけになっています。これを自慢する社内の空気がありますが、私は違うと思います。

たします。

（筆者は毎日放送開局50周年ドラマスペシャル『さげんいかか？ ティンベア』で第28回放送文化基金賞ドラマ部門大賞および演出・脚本賞受賞）

☆☆☆☆

☆☆☆☆

新刊書案内

「テレビ局が潰れた日」

石光勝著

（アートデイズ 1800円）

題名は挑戦的だが、編成現場からキー局間の熾烈なシェア争いを見つめ、「新潮45」など折りに触れ書き溜めた論文やエッセーを再構成した書。現場論的な立場から試みたテレビ文化論。氏は元テレビ東京常務、長く編成局長を務めた。

……………

『読み聞かせる戦争』（光文社）

日本ペンクラブ編

加賀美幸子選

「きけわだつみのこえ」をはじめ「夏の花」（原民喜）など残された語り継ぐべき言葉の数々を27編に集めたアンソロジー。CDつき。加賀美さんが朗読しておられます。

（光文社・1800円）

某月某日現場発

走る、走る、そして走る！

星田良子

七月七日

暑い！ なんとかならないの、という位、ア・ツ・イ。

「ああ、今、現場入っていなくてよかったなあ」と思いつつ、しばし、去年の回想モード。

去年の今頃は、TBS・水10時枠

「マリア」の制作の真っ只中で、連日超猛暑の中、新宿の街を走り回っています。

ホントに文字通り、走り回っていたのです。

理由は、単純。予算の少ない中で、ハイクオリティーのものを創るには、宅送ナゾの経費出さないと、その分、少しでも絵にかけたいから。

ここ数年、自分の作品は、意識的にカット数を多くして、動的、激的フアクターを強く狙っているのですが、単なるカットバックならいざ知らず、一つ一つのカットを、けっこう狙っているのです、ワンカットづつカメラアングルが変わるわけで。

でも、それをスピーディーに、すみやかに撮るには、必然的に、走りだすわけで。

以前「花王 愛の劇場」を撮った時

は、主演の片平なぎささん以下、御出演の皆さんが衣装替えの往復をいつも走ってくださいましたし、「刑事コロンボ」の堺正章さんは、星田の現場の時は、一回もタバコを一本まるまる吸えなかった（すぐ呼ばれるので）と冗談交じりに嘆いておられました。

スピーディーに、かつ、濃密に。これが私の現場のテーマです。

人間、生身ですから、あまり時間をかけることで、持久力を失われることもあるじゃないですか。特に今の若い俳優さんたちは、瞬発力はすごいけど、持久力は弱い気がしています。例えばあるシーンに（極論言つて）百時間かけられるなら、当然、そうします。多分、一度テンションが上がって、次に一回ダウンと落ちて、で、最後はすべての完璧な段取りの上で、より完璧な芝居が成立するーと思います。

ただ、今、ありがたいのは、仕上げのハード機器の進歩と充実。

NHKハイビジョン「海狼」を制作した時は、もちろん現場で走り続けましたが、それでも、海が舞台だったので、天候がバラついたり、一つのシーンを四日にわたって撮ったり、現場での仕上がり度は六割。それを、仕上げでインフェルノとい

う合成編集機を使うことでバラバラだった色調が統一され、ドン天だった日の絵は、太陽のハレーションを合成して色調を変えることで、さわやかな晴天になる、といった次第。ドン引き（ルーズショット）による見切れも、今までなら、そこをふさぐために、美術さんが慌てて壁をつけたり、そのために待ち時間ができたり、でしたが、今回はそれも仕上げ作業に持ち込むことで（インフェルノを使うと、絵が動いても、比較的楽に作業できます）現場で慌てたり、つまらない時間のロスは防げました。

これから、ますます機器が充実していく中、現場は仕上げ作業を見越して、逆算でどこまで現場で作り上げればいいのかという判断を的確にすることが大切になっていくのではないのでしょうか。そのためのハード機器の勉強と知識の吸収。

我々、シバリのある制作会社の人間には、ゼツタイ必要なノウハウです。

七月〇日

ホン（脚本）がきた！

秋のTBS連続ドラマ（水・10時枠）の第一回の第一稿がきました。西荻弓絵さん、さすが！です。

独特の毒が好きなのですが、今回もそれは健在。いい脚本をいただける現場は、ホントに幸せです。

七月〇日

予算ー予算ー！予算ー！

なかなか、シメつけが、もう始まりました。一度でいいから、好きないようにしたいよ」という現場がないものかー。局制作がつくづく羨ましい。

でも、お金がかけられない分、知恵とアイデアで勝負です。決して見劣りしないように。

だから、マレに、評論家なるお方が「テレビは金をかけないから。下受けにだすから、品質が劣化している」と、おっしゃるのを見聞きすると、ホントに頭にきます。

そういう方に、一度でいいから、自分の現場に来て欲しいー下受けをバカにしないでほしいです。

七月〇日

エスキモーの唄。

「今日はいいい日だ。天気もいい。実りも豊か。死ぬのにホントにふさわしい」

そんな、いい日を夢みてー。さて、命がけの、最高に楽しい時間が始まります。

時計がー動き出しました。先輩、同僚の皆様、ぜひぜひ厳しく、暖かい御批評をくださいませ。

（共同テレビ）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

あんでな俳壇

校歌聴く背中に涙の赤蜻蛉 (舞吉)
 夏欠くる浜辺に浅利独り掘る (傳助)
 水虫のかゆみぞ暑さ責めのぼる (凡)
 往く夏や蟬の骸に猫じゃれる (赤坂)
 月みちて嫁が気配に猫喰る (鶴鳩)
 てやんでえ酔いに漬れて思案橋(卯女)

冥るのは鯉の秋ぞ酒二盃 (烏鬼)
 せつなさを唄う蛸 風立ちぬ (拾子)
 浴衣着てよろける下駄やモ一娘。(純)

大川や橋のたもとの二人連れ (桔梗)
 ときめきてケータイ探る秋の宵(花子)
 秋めきて汁の薄きをなじるつま(頑固)

(あたかい)ご批評を...
 句心あるお方、投稿を...

全国「ふだんの番組」フォーラム
 参加者アンケート回答

8月7日現在

<良かった点>

他局の番組やパネラーの考え方が参考になった (福島中央テレビ)
 系列を越えた交流に意味があった (鹿児島テレビ)
 なによりもローカルの考え方を聞いてもらえたこと (テレビユー山形)
 (広島ホームテレビ)
 「放送文化」について真剣に討議できたこと (富山テレビ)
 実例検討で分かりやすかった (テレビユー山形)
 番組をきちんと考える貴重な機会となった (長崎文化放送)
 「ローカルに徹すれば普遍性を持つ」の信念を再確認できた
 (大分放送)

越前屋氏の起用が良かった (テレビユー山形)

<継続について>

賛成だが、参加費が高い。1万円くらいで。
 懇親会が大切なので、午後始まりの1泊2日制にしたら? 1日集中
 討議でよい。
 若手を参加させたい。
 実践編に絞って徹底討議を。
 交通アクセスからすると都内で。
 「中央対地方」という対比はやめて、ローカルオンリーで討論。
 もっと多人数の会議にしてほしい。

新会員紹介

- ・遠藤ふき子 (NHK「ラジオ深夜便」月曜)
- ・沖野暎 (NHKドラマ班)
- ・星田良子 (ドラマ演出・共同テレビ)
- ・川野楠己 (NHKドキュメンタリー)
- ・佃由美子 (スターゲート取締役)
- ・山田良明 (フジテレビ広報局長)
- ・小川秀夫 (元フジ・共同テレビ)
- ・大蔵雄之助 (東洋大学教授)
- ・山県昭彦 (構成作家・「平成ラジオ塾」主宰)
- ・佐々木彰 (テレビ東京制作局)
- ・小里光 (元日本テレビ演芸研究)

以上の方々が入会しました。
 ご活躍を期待します。

お知らせ

放送人の会のリーフレットを作り
 ました。会の主旨、活動内容をはじ
 め在来組織とは違う自由闊達な会
 の方向をコンパクトにまとめた小冊
 子です。入会勧誘資料として活用し
 てください。部数を指定して事務局
 までお申し出てください。

編集後記

◆例によって雅浩・羊一の編集コ
 ンビ。割付けも半ば終わればゆきつ
 けの近場は「膳」なる飲み屋。見渡せ
 ば紀尾井町のOLがズラリ。おネー
 ちゃんたちの飲みっぷりに見惚れ、
 「花は半開を見、酒は微酔に飲むべ
 し。中に佳境在り」。半玉を侍らせ、
 酒はホロ酔いにしくはなし、の意か。
 老人二人、こなたで心眼にてOLた
 ちを芸者にお見立ての、鰻の匂いを
 おかずに飯を食う落語的心境也。
 ◆バキさん フェスティバル。8月
 29日は藤田敏八(映画監督)5年目
 の命日です。映画に、後年はテレビ
 名脇役で活躍。「CORRIDO」で
 は当日は朝から翌朝(ー)まで痛飲
 会。映画・テレビ界の皆様と昭和晩
 年を語る会でもあります。お仲間を
 連れ添って昼酒、晩酌、徹夜酒、気
 ままに是非どうぞ(桃井章)。
 ◆8月は酷にして猛暑、されば「ボ
 ロ家でクーラーつけ放し。電気代タ
 マンナイと、カーちゃんオコルのよ」
 てんで事務所を避暑地代わり利用す
 る会員が出現! いろんな使い道が
 あるようで。冬号の頃はコタツ代わ
 か。暖まり代を徴収しようか。
 (会報編集部・伊藤雅浩 松尾羊一)